

所外研修⑪ 授業改善担当教員ブロック研究成果報告会 数学部会に参加

所外研修として、2月18日(木)に島尻教育事務所で開催された授業改善担当教員ブロック研究成果報告会 数学部会の「講話」を拝聴しました。
 数学部会の講話は、文部科学省 国立教育政策研究所 新井 仁 学力調査官による「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業づくり～アクティブ・ラーニングを視野に入れて～」と題して行われました。
 初めに算数ブロック研究成果報告会の発表から見えてきたことを実際の発表から実例を挙げながらのお話、次に高知県高岡中学校の実践、最後に毛涯章平さんの『肩車にのって』という本から「教師十戒」で締めくくられました。
教育研究員の感想 (研修日誌から)

今日の国立教育研究所・学力調査官 新井仁氏の講話では、とても子どもたちの主体性を大切にしていこうということが伝わってきました。その為にも教師の授業に対する心構えと授業改善の重要性を熱くお話されていました。話を聞きながら、「教師の待ちの姿勢が、子ども達が他者と伝え合う活動へ変わっていく」「提示物とは何を提示することなのか。きちんと教師の意図性をもって行うこと」等、幼稚園教諭における環境構成と援助の工夫と似ている視点だなと思いました。また、問題を解決する解くだけでなく、それを生活の場面に返すための工夫が授業の中で大切だと言っていました。“実生活に生かす”という視点で、幼稚園でも日常生活を通じた指導の大切さを改めて気付きました。講話の中で一番印象に残った言葉は「ぜひ！教師のワクワク感を忘れないでいてほしい」という事です。プロ意識をもって取り組むことの大切さを感じました。(国吉亜矢)

新井調査官のお話は、中学校向けだったのですが、小学校にも通じることが多々ありました。まず、授業は、児童生徒の個人解決の時間を十分に取ってあげなければならないということです。子どもたちが、課題に対して個人追求しているとき、教えたがる教師がいるので、子どもの考えるチャンスを奪ってはならないというものでした。このことは、数学のみならず、算数でも、国語でも、道徳でも、全ての教科について同じ事が言えると思いました。次に、言語活動において、話形にこだわらずに、数学的な表現があるかないかで評価をしないといけなというものです。しかし、小学校においては、話形に当てはめることで、説明しやすくなる事が多いので、中学への基礎として、勿論、数学的表現も意識しながら、話形も意識させた指導をしてもいいのかなと感じました。それから、児童生徒が、わくわくするような教材開発をしようというもの。新井調査官は、「教師自身が、もっとわくわくして欲しい。その素材を教材化して欲しい。」と話していました。子どもたちが主体的に学ぶためにも、数学においても教材開発は、必要なのだと感じました。さらに、「学校の先生って、もっとプロじゃないといけない」と語っていました。数学の教師なら、もっと数学について勉強して欲しいとのことでした。『教師十戒』の中にあった「教師の力以上には、子どもは伸びない。精進を怠るな。」という言葉は、ずっぴりと私の胸に残りました。私は、教師としての努力を怠らず、しっかりがんばっていきたいと思います。(比嘉頼子)

学力調査官の新井先生の講話は小学校でも実践できそうなこと、納得できることもありました。まず、「説明は何のためにさせるのか」という質問がありました。もちろん相手へ伝えることも大切なのですが、自分の理解を深めるというもう一方の面もあることを知りました。また、参考になると思ったのがまとめの工夫でこれができるから生活場面はどう生かせるかまで考えさせるともっと子ども達は算数の必要性を実感することができ、主体的に学習に取り組むことができるのだと感じました。高岡中学校の問題は生徒がとても興味持って取り組むことができるだろうと思いました。上腕骨の学テ問題からスキーの板の問題をもってくるのは日常でアンテナをはってないとできません。ただ、年間1つでもこのように自分や学年で考えた問題ができるといいなと思いました。最後の「教師十戒」という毛涯章平さんの『肩車にのって』という本からの戒めのようなものがあり、その中でも「外傷は赤チンで治る。教師の与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。」という言葉が印象に残りました。今日の講演を聞いて早く現場に戻って授業をしたいと感じました。(久高友弥)

新井学力調査官の講話で「ダイヤモンドの原石を磨けるのはダイヤモンドだけだ」という言葉が印象に残りました。その言葉には、どんなにいい素材や教材があってもそれを教える教師の技がなければ意味がないという意味合いが含まれていると感じました。内容については、中学校数学向けということもあり、難しく解釈できないところもありましたが、何でもすぐ教えるのではなく、生徒と疑問点を共有し、生徒同士が協働的に学習できる環境づくりをしてあげることが教師の役目であることや、自力解決の時間は十分にとり、教師は必要以上に介しないことなど教師が大事にしないといけない授業のマネジメントを改めて知ることができました。正直なところ、沖縄県が行っているめあての立て方は「～しよう」のような行動目標でなく、「～ができる」なのに対して、新井調査官が紹介した高知県の学校では行動目標にしていることや机間指導を「机間巡視」と表現する所など、都道府県によって違うので、国なのか県なのか、または個人なのか…難しいと思いました。(富名腰由紀)

アクティブ・ラーニングは、新しくて古いものなのかなと感じました。数学のことで講話されていましたが、理科の授業で考えると演示実験または、グループごとの生徒実験を行う場面があり、生徒が主体的になりやすいのでアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践はこれまでも実践していると思いました。しかし、これからの子ども達に必要な資質・能力を考えたとき、生徒同士がお互いに関与する協働的な学びの中で「知っていること・できることをどう使うか」を育成していくことができるのは、学校という教育現場だと感じました。学校に同年代の生徒が集まる意味を最大限に活かせる環境を活用した授業づくりを実践していきたいと思いました。アクティブ・ラーニングのキーワードとして「主体的」「協働的」だと思います。教えることを中心にするのではなく学習(学ぶ)を中心にするので実験がたのしいだけにおわるのではなく、なんとなく活動するのではなく、思考をはたかせるような学習活動を視点において理科の授業をめざしてこれからさらに勉強していきたいです。(波照間生子)